サビエルの右腕

貸し切りバスでピレネー山脈を越え、ナバラ州にあるサビエル城に着いたのは、サビエルの生誕日一週間前の三月三十一日であった。

生誕五百年を祝ってサビエル城を中心にいろいろなセレモニーが続いていた。その目玉の一つがサビエルの右腕である。

日ごろはローマのイエズス会の本部に安置されているが、生誕五百年を祝ってサビエル城に貸し出されていたのだ。

右腕は日本にも二度、来たことがある。一回目はサビエル渡来四百年の際、二回目は渡来四百五十年の時で、覚えている人があるかもしれない。

サビエルの聖腕（右腕）

腐らない遺体

さて、ルルドの聖ベルナデッタの遺体が腐敗していないことは先に紹介した。実はサビエルの遺体も腐敗しなかったのである。

中国の上川島で客死したサビエルの遺体をイエズス会の東洋の拠点、インドのゴアに運ぶのにそのままでは船長から断られ、遺骨にして運ぶことになり、ひとまず棺に石灰を入れて埋葬した。石灰を入れたのは、腐敗が早く進み、きれいな骨として取り出すためである。

船の便が決まり、二カ月後に棺を掘り出すと、体も服も全く腐敗していなかった。

驚いた船長は遺体のまま船に乗せることを許可し、インドのゴアに運ばれた。

この話がヨーロッパに伝わると「これこそサビエルが聖人である証拠」と、そのままヨーロッパに運ぶことが検討されたが、アフリカの喜望峰を回っての船旅は無理で、右腕だけ切断してローマに送るようイエズス会の総長から命令が出された。

なぜ右腕かといえば、日本でも「彼は社長の右腕だ」などと言われるように、ヨーロッパでも右腕は大事な部分だったからだ。

右と左、右腕に象徴されるように左の方は下位、悪いとされる言葉が多い。左遷、左前、左巻き、左大臣…我が家の左大臣は妻、私は右大臣。ところが大臣は左大臣の方が上位である。我が家の実態に合っているが…。左うちわも良い意味。ちなみに広辞苑によると、右の説明は十四行、左は七十六行。特別な意味はないが、なんとなく左の方が深みがあるようにも思える。

ともかく右腕はローマに送られ、聖人申請に利用された。

聖人はバチカンが調査、決定するもので、キリスト教のために殉教した者、キリストにならって立派な生き方をした者、奇跡があった者などが基準になるらしい。

腐敗しないことも奇跡の一つで、それだけではないだろうが、サビエルは死後わずか七十年、一六二二年に列聖された。

右の上腕は日本に

サビエルの遺体は今もインドのゴアで銀のひつぎに安置されているが、一説によると右腕を切断したため腐敗が始まったとか。今はミイラ化して十年に一度、公開されている。

なお右腕がローマに送られたあと、ひじから肩までの上腕部分が切断され、日本に送られることになった。

それは、日本のキリシタンが迫害されているので、それを励ますためであったが、日本の鎖国政策が厳しく、マカオまで送られたが実現せず、今もマカオの教会にある。

それにしても、骨になっても活躍させられるとは骨が折れる話である。

（山口放送元取締役ラジオ局長）

サビエルが洗礼を受けた洗礼盤